

目次(「流れゆくものの賦」)

はじめに

編集に当たって(凡例)

冬・初春の部(十二月・一月・二月)

木下夕爾の「雪の記憶」(江連博:稿)

- 1 雪(1~100) 2 師走・年惜しむ(101~105) 3 クリスマス・古暦(106~107)
4 除夜の鐘(108) 5 去年今年(109~113) 6 元朝(114~117) 7 破魔矢(118~119)
8 若水(120) 9 年酒(121~123) 10 初景色(124) 11 初御空(125~126)
12 初東風(127) 13 初詣(128~129) 14 初茜(130~134) 15 初声(135~136)
16 初雀(137~139) 17 初鴉(140) 18 初日記(141) 19 読初(142) 20 淑気(143~145)
21 御降り(126) 22 左義長・どんと焼き(22) 23 鳥総松(148~149) 24 松納(150)
25 若菜摘(151~152) 26 七日粥(153~154) 27 成人の日(155) 28 近松忌(156)
29 波郷忌(157~161) 30 芭蕉忌・桃青忌(162) 31 蕪村忌(163) 32・33 冬(164~213)
34 時雨(214~220) 35 霽(221~223) 36 霰(224) 37 そぞろ寒(225) 38 大寒(226)
39 寒気(227) 40 木枯(228~230) 41 凧(231~232) 42 虎落笛(233~234)
43 寒星(235) 44 寒昂(236) 45 風花(237) 46 かじかむ(238~239) 47 凍つ(240~246)
48 風邪(247) 49 日向ぼこ(248~250) 50 囲炉裏(251) 51 炉火(252~253)
52 櫓(254~255) 53 息白し(256) 54 くさめ(257) 55 水洩(258~259) 56 湯豆腐(256)
57 山眠る(257) 58 枯野(258~264) 59 枯山(265) 60 春隣(266) 61 白鳥(267)
62 笹子(268) 63 鷹(269~271) 64 鴨(272) 65 雁(273~276) 66 寒鴉(277)
67 凍蝶(278) 68 雪虫(279) 69 熊(280) 70 枯芝(281~282) 71 枯草(283)
72 末枯(284~287) 73 山茶花(288) 74 寒椿(289~291) 75 帰り花(292)
76 石路の花(293~294) 77 石榴(295~297) 78 葱(298) 79 大根(299) 80 二月(300)

春・初夏の部(三月・四月・五月)

柿本人麻呂の反歌(江連博:稿)

- 81 花・桜(301~350) 82 春(351~383) 83 遅日(384~385) 84 涅槃西風(386)
85 東風(387) 86 若葉風(388) 87 風眩し(389) 88 麗ら(390~394) 89 朧(395)
90 霞(396) 91 絲遊(397) 92 啓蟄(398~402) 93 北窓開く(403~407) 94 鳥曇(408)
95 鳥雲に(409) 96 春愁(410~413) 97 春思(414) 98 春痕(415) 99 遍路(416)
100 野火(417) 101 野焼き(418~419) 102 野老掘る(420) 103 しもかれ(421~422)
104 受験(423~428) 105 ふらここ(429~431) 106 二月尽(432) 107 弥生尽(433)
108 エイプリルフル(434~440) 109 三鬼の忌(441) 110 西行忌(442)
111 蝶(443~446) 112 巢立鳥(447) 113 田螺(448) 114 田鶴(449) 115 恋猫(450~451)
116 雲雀(452~456) 117 つばめ(457) 118 囀り(458~459) 119 馬の子(460)
120 梅(461) 121 菜の花(462~465) 122 竹秋(466) 123 春野(467) 124 青梅(468)
125 卯の花(469~473) 126 迎春花(474) 127 犬ふぐり(475) 128 えのころやなぎ(476)

129 萌える(477～478) 130 緑立つ(479) 131 新樹(480～483) 132 蒲公英(484)
133 土筆(485) 134 椿(486～487) 135 酒中花(488) 136 八汐(489) 137 躑躅(490～496)
138 梨の花(497～498) 139 芹(499) 140 山吹(500)

夏・初秋の部(六月・七月・八月)

高柳重信の「日本海軍」(江連博:稿)

141 夏・炎天・八月十五日(501～550) 142 入道雲(551～552) 143 暑(553～556)
144 三伏(557) 145 五月雨(558～560) 146 五月闇(561) 147 梅雨(562～571)
148 喜雨(572～573) 149 夕立(574) 150 雷(575～581) 151 夕焼(582)
152 虹(583～586) 153 日盛り(587～588) 154 旱(589) 155 滴り(590)
156 涼風(591～593) 157 涼し(594) 158 納涼(595) 159 青田(596～598)
160 麦秋(599～605) 161 夏陰(606～607) 162 片翳り(608～611) 163 青嶺(612～614)
164 明け急ぐ(615) 165 風死す(616) 166 清水(617～619) 167 汗(620) 168 冷房(621)
169 帰省(622) 170 風鈴(623) 171 浴衣(624) 172 繭(625) 173 巴里祭(626)
174 水遊び(627) 175 川狩(628) 176 花火(629～634) 177 土用(635) 178 草むしり(636)
179 素足(637) 180 避暑(638) 181 夏風邪(639) 182 鯉幟(640～642) 183 吹流し(643)
184 冷奴(644～645) 185 胡瓜もみ(646～647) 186 胡瓜(648～649) 187 天道虫(650)
188 蝸牛(651～653) 189 蛇(654～658) 190 夏鳥(659) 191 蝉(660～662)
192 つばめ(663～667) 193 河鹿(668～669) 194 鮎(670～671) 195 蛭(672～676)
196 羽蟻(677～678) 197 行々子(679) 198 青蛙(680～682) 199 蝦蟇(683)
200 尺蠖(684～685) 201 小雀(686～694) 202 青葉木菟(695) 203 椎落葉(696～697)
204 柿若葉(698) 205 えごの花(699) 206 若楓(700～703) 207 紫陽花(704～711)
208 麻(712) 209 牡丹(713～717) 210 わくら葉(718～722) 211 沙羅の花(723～739)
212 くちなし(740～741) 213 万緑(742～748) 214 緑立つ(749) 215 あやめ(750～752)
216 杜若(753) 217 残花(754～755) 218 余花(756～767) 219 掬花(758)
220 萍草(759～760) 221 花煙草(761) 222 月見草(762～763) 223 朴の花(764～765)
224 夕顔(766～768) 225 木下闇(769) 226 苔の花(770) 227 矢車草(771～772)
228 野茨(773～775) 229 卯の花腐し(776～777) 230 桐の花(778～779)
231 草茂る・葦茂る(780～782) 232 草いきれ(783～784) 233 西瓜(785)
234 干瓢(786～787) 235 蓮の花(788) 236 泰山木の花(789～790)
237 栗の花(791～792) 238 十薬・どくだみ(793～798) 239 百合(799)
240 金雀枝(800)

秋・初冬の部(九月・十月・十一月)

中原中也の「一つのメルヘン」(江連博:稿)

241 秋・秋桜(801～850) 242 新涼(851) 243 長き夜(852～853) 244 天高し(854～856)
245 野分(857～860) 246 台風(861) 247 天の川(862) 248 鰯雲(863～864)
249 秋雲(865) 250 霧(866) 251 敬老の日(867～868) 252 文化の日(869～870)

253 去来忌(871) 254 澄生忌(872) 255 案山子(873) 256 刈田(874～878)
257 下り築(879) 258 稲番(880) 259 稲架(881～882) 260 花野(883～884)
261 松手入(885) 262 粧ふ山(886～887) 263 盆(888～891) 264 ひぐらし(892～894)
265 せきれい(895) 266 とんぼ(896～904) 267 鶴渡る(905) 268 百舌(906)
269 鶇(907) 270 嶋(908) 271 鯖鮎(909～910) 272 虫・ちちろ(911～914)
273 いなご(915～916) 274 綿虫(917) 275 穴まどひ(918～919) 276 蜘蛛(920～921)
277 朝顔(922～933) 278 萩(934～935) 279 撫子(936) 280 満天星紅葉(937)
281 竜胆(938～940) 282 豆(941) 283 曼珠沙華(942～950) 284 紅葉(951～952)
285 落葉(953～955) 286 栗(956～959) 287 鬼灯(960) 288 桃(961～963)
289 稲(964～965) 290 通草(966～970) 291 芋(971～972) 292 茸(973～974)
293 烏瓜(975) 294 木犀(976～977) 295 菊(978～990) 296 鶏頭(991)
297 赤まんま(992) 298 紫苑(993) 299 柿(994～996) 300 葡萄(997～1000)

(付章)一つの昭和俳句史…桑原月穂の軌跡…

あとがき

註: 上記の表示で、例えば、300 葡萄(997～1000)の、300 は季語番号、(997～1000)は句番号を示す。

表紙の絵(江連博画「流れゆく小舟」)

この「流れゆく小舟」は亡き兄(江連博)が好んでモチーフとしたもので、このモチーフでの大作(F 5 0 号)も、身内の家の何処かに飾ってあるやに記憶している。私(江連晴生)の所のものは、比較的小品で、その大作のための習作のものと思われる。遠くに、跳ね橋があり、小舟が流れていくというもので、この跳ね橋は亡き兄が終生愛したゴッホのそれであろう。しかし、この流れゆく小舟は、二本の漣標が描かれており、亡き兄には直接聞いてはいないのだが、亡き兄の心の片隅に何時も存在していたと推測される三好達治の『測量船』のイメージに思えてくるのである。今ではそれを確かめる術も無い。

裏表紙の写真(江連博建立「頌母の碑」)

この「頌母の碑」は、平成七年十月に亡き兄(江連博)が、亡き兄の茶室から見られる位置の所に建立したものである。

繭を煮る母の背中にあたりけり 晴生

この句(句番号:625)は、亡き兄より「晴生開眼の一句」とお褒めの言葉を得たもので、平成元年以前の平畑静塔選の思い出深いものの一つである。亡き兄はこの句に次の自分の付句をして、それに「頌母の碑」と銘をして一人悦に浸っていた姿を思い出す。(これらのことについては本書の「冬・初春の部」の冒頭の「木下夕爾の『雪の記憶』」として亡き兄の記録の一節を収載した。)

深山朴咲く遠き紡む音 博生

表紙裏: 半歌仙「流れゆくものの賦」の巻(留書き)

[表]発句(春)	流れゆくものの賦のごと春の舟	晴生
脇 (春)	地ビール飲んで温し湖行く	一爽
第三(春)	麗日やまた去来する人がいて	洋治
四 (雑)	富士山荘の思ひ出多し	幸
五 (月)	月代の山腹の灯もかすかなり	英史
折端(秋)	祭り囃子が坂のぼりくる	一爽
[裏]折立(秋)	母の呼ぶ鳥が森に秋時雨	洋治
二 (雑)	想ひ再び夕暮れの寺	久枝
三 (雑)	那須の里舞ひ散るものを惜しみつ	典夫
四 (恋)	長き黒髪指添えながら	晴生
五 (恋)	尼語る十五の恋の物語	芙佐
六 (雑)	空に白雲鳥の群れ見ゆ	節
七 (月)	夏の月銀河鉄道ごん狐	昭一
八 (夏)	帰省鞆にC D四・五枚	英史
九 (雑)	降り立ちし無人の駅に風一陣	一爽
十 (雑)	裏の里山夕陽に染まり	久枝
十一(花)	花見した小道をたどる老夫婦	敏代
折端(春)	希望の明かり春の那須山	昭一

(留書き) 平成十四年二月に典夫・久枝家の法事があった。その法事の前日、晴生・芙佐宅に、英史・一爽夫妻と洋治・幸夫妻が一泊し、表の六句を巻き、その翌日、法事の前に、亡き博・敏代宅に赴き、その六句を手向け、敏代義姉、昭一・節夫妻、典夫・久枝夫妻に、裏の十二句について文音で巻くことの了承を得た。亡き博兄と晴生は「二人句会」と称して、何巻か連句を巻いたことがあるが、他は、こと連句については初めてということであったが、何回か黒田杏子選を得ている久枝姉、短歌・書を得意とする一爽姉、そして、英文学の教鞭を取っていて英詩に造詣の深い英史義兄が、晴生の捌きを支援するということで、とにかくにも、上記の通りの半歌仙を巻くことができた。と同時に、亡き博兄の追悼のための本句集の刊行に際して、英史義兄が全章を通して朱入れをして頂けることになり、そのローマ字表記等について抜本的なご指導を得ることができた。また、本句集の題字については、これまた、一爽姉のご揮毫を賜った。なお、最後に、発句の上五・中七の「流れゆくものの賦のごと」は、亡き博兄の棺に入れた良寛の漢詩の一節[我生何処来(ワガショウイズコヨリキタル)/去而何処之(サリテイズコカニユク)]と上記の亡き兄の絵(流れゆく小舟)よりのイメージに、亡き兄のライフワークであった「詩」(賦)と亡き兄の「もののふ(いくさびと)」的なイメージを重ねあわせてのものである。

読みの「ローマ字」及び「間・切る・切字」などの表記について

- 句の読みは、句形が「旧仮名遣い」でも全て「新仮名遣い」での「ローマ字」表記とし、ローマ字表記は、原則として「ヘボン式」で表記した(例:「しゃ・しゅ・しょ」は「sya・syu・syo」ではなく「sha・shu・sho」など)。なお、促音(っ)については子音の連続で表記した(例:「行った」は「itta」など)。「んや(nya)」については「にゃ」と区別するため「n'ya」とアポストロフィを入れた。「を」については助詞の場合の他は「wo」ではなく「o」で表記した。「遠き」などについては「touki」ではなく「tooki」で表記した。
- 句の読みの「間」・「切る」・「切字」の表記は、それぞれ「*」・「/」・「//」で表記した。「切字」については「や・かな・けり」に限定した。「二句一章」の例えば「ささめ雪火の見櫓を攻めあぐむ」(句番号・1)は、本来「ささめ雪/火の見櫓を*攻めあぐむ/」と表示すべきなのであるが、上五・中七の「や・かな・けり」以外は、全て「ささめ雪*火の見櫓を*攻めあぐむ/」と表示し、上五・中七の「間」と「切る」との区別の表示はしていない。
- これらの「読みの『ローマ字』及び『間・切る・切字』の表記について」は試行的なもので、特に、「間・切る・切字」の表記は句作者の私註の域を出ないことを付記しておきたい。

